



あなたに伝たい

循環する時間というものもある。こちらの方が僕らの美的経験、芸術経験にふさわしい時間なのではないか。太陽の出入り、月の満ち欠け、満潮、干潮…。

梅雨空の七夕。冬真っただ中の正月。満月かどうか分からない十五夜お月さま。季節感が豊かな日本文化のほずなのに、伝統と曆がずれている。原因は明治維新で旧曆(太陰太陽曆)を無理やり新曆(太陽曆)に変えたことにある。日本人の季節感を取り戻すため、月の動きを大切にす旧曆を復権させ、新曆との併用を呼びかけているのが広島大名譽教授の美学者金田晉さん(へ)だ。「旧曆の勧め」を聞いた。(増村光俊)

また旧曆とはどのようなものですか。地球が太陽を回る公転を基準にするのが太陽曆、月(太陰)が地球をまわる公転を基準にするのが太陰曆。前者は一年約三六五・二五日で、後者は月約二九・五日。これに十二をかけると一年三百五十四日。両者の間では一年間で十一日程度のずれがある。それを調整したのが太陰太陽曆。農業に役立つ曆でかつては世界で最も一般的だった。今旧曆と呼ばれている曆はその日本版で「天保曆」とよばれ、世界で一番正確な太陰太陽曆といわれている。「旧曆」というと、今ではまったく使われていない曆であるかのように思われるが、農業漁業や茶道など伝統文化の世界では生きている。

金田 晉 広島大名譽教授

季豊かで曆がよく似合う風土だった。太陽曆と太陰曆のずれを調整するために古代人は十九年に七回うるす月を入れた。両者の誤差は二時間程度。十九年で曆が一巡りする。この方式は提案者の古代アテネの数学者の名前をとってメトン周期とよばれているが、中国にも殷時代にすでに知られており、紀元前後には「章」とよばれて定式化されていた。日本へ最初に入ってきた曆はすでに「章」が組み込まれていた。古代バビロニアにもそういった考え方はあったという。古代人の知恵の深さには驚かされる。

僕は半世紀以上美学を専攻して、美術や文芸に親しんできた。すべた作品には命のリズムが感じられる。リズムとは時間の表現だ。ただ、現代の時間は直線のイメージ。歴史的な時間の中で起こったある出来事、例えばキリスト誕生を起点として、終末に向かって一直線に進んでいく。後戻りはできない。その出来事以前は逆向き(紀元前〇〇年など)に数えていく。だから進歩や進化、発展がキーワードになる。このような思想が広まっていくのは西曆(グレゴリオ曆)が一般的に西欧のキリスト教社会でも十七世紀以降といわれる。この考えだと文明の進歩は加速度的に進むが、滅亡もそれに合わせて早まる。それは耐えられないと思った。

循環する時間というのは聞き慣れないです。具体例をお願いします。地球が自転し昼と夜が繰り返される。太陽の周りを地球が動き、その地球の周りを月が動く。新月から満月を経て新月へ。それに合わせて地球の表情が変わり、季節の変動、植物の成長、動物の生殖が生まれる。そこに人間が加わり農業が始まる。二十四節気、七十二候、丙午などの十二支。これらは循環する時間だ。

五月五日のごどもの日のこのほり。今ではゴールデンウィークの五月晴れのキャッチコピーによく使われる。でも本来、夏の季語。長い梅雨(五月雨)と梅雨の間の短い晴れ間、湿度が多く、暑くてすく蒸し蒸しする。空にコイを泳がせれば、自分が水の底にいたような気分になり、幾分でも涼気が感じられる。毎年この時期に繰り返される。瘦せ我慢の趣向だ。七夕も今年八月十七日が本来の日だった。季語は秋で、旧曆の七日は上弦の月。夜空を見上げると、東の空にわし座の一等星アルタイル(心星)とこと座の一等星ヘカ(織り姫)が輝いている。はくちよう座の一等星テネブ(カササギ)の仲立ちで、両者は一年に一度の逢瀬を楽しむ。だが月は夜十時ごろに沈む。そのときまで見えていなかった天の川が突然現れ、二人の間を遮ってしまう。こうした天体ショーをもとに七夕の話は出来上がった。東アジア独特の伝説。七夕は本来旧曆のもので、新曆の七月七日では梅雨の最中。星空など期待できない。九月九日も菊の節句といわれますが、菊はまだ露地では咲いていないです。

旧曆とは直接の関係はないのですが、曆との関係で、元号についてはどうお考えですか。来年五月には新しい元号になる予定です。確かに直接の関係はありません。ただ、元号には国を治めるとき、この一年一つがななく治めてきた。次の一年も一つがななく治めていく。こう、という循環の考えが背景にあると感じる。言えるのは、時間是一本化するようなものではなく、もっと豊かなものだと感じます。明治にはじまる一世一元の制以後、元号は天皇の治世の表示を除けば、西曆以上の情報はなにも盛り込まれなくなりました。これは中国の明朝から始まった制度で、天皇を権威づけるため、中国の皇帝制度を見習ったものでしょう。かつてはもっと臨機応変だったよう。平安時代から江戸時代まで千余年間に二百回ほど元号が改元された。例えば書くときに西曆だと算用数字が、旧曆だと漢数字がしつくりきますよね。同様に、充実した時間の再生のため、新しい元号が旧曆と結び付けたいいな、と。旧曆に記憶された伝統と文化、僕らが日々体験している季節感が結びつくようにないかな、と思えます。

旧曆と併用なら四季と結び付く



写真・増村光俊

これとは別に循環する時間というものもある。こちらの方が僕らの美的経験、芸術経験にふさわしい時間なのではないか。太陽の出入り、月の満ち欠け、満潮、干潮…。

世界では複数の曆を併用する地域は多い。イスラム教諸国は今も太陰曆を使っている、イスラエルもヘブライ曆を併用している。ヨーロッパでも各地でグレゴリオ曆以外の曆が民間伝承の形で残っている。韓国、中国では旧曆もまだ使われていますよね。日本だけがどうして曆を一元化するのか。

五月五日のごどもの日のこのほり。今ではゴールデンウィークの五月晴れのキャッチコピーによく使われる。でも本来、夏の季語。長い梅雨(五月雨)と梅雨の間の短い晴れ間、湿度が多く、暑くてすく蒸し蒸しする。空にコイを泳がせれば、自分が水の底にいたような気分になり、幾分でも涼気が感じられる。毎年この時期に繰り返される。瘦せ我慢の趣向だ。七夕も今年八月十七日が本来の日だった。季語は秋で、旧曆の七日は上弦の月。夜空を見上げると、東の空にわし座の一等星アルタイル(心星)とこと座の一等星ヘカ(織り姫)が輝いている。はくちよう座の一等星テネブ(カササギ)の仲立ちで、両者は一年に一度の逢瀬を楽しむ。だが月は夜十時ごろに沈む。そのときまで見えていなかった天の川が突然現れ、二人の間を遮ってしまう。こうした天体ショーをもとに七夕の話は出来上がった。東アジア独特の伝説。七夕は本来旧曆のもので、新曆の七月七日では梅雨の最中。星空など期待できない。九月九日も菊の節句といわれますが、菊はまだ露地では咲いていないです。

旧曆とは直接の関係はないのですが、曆との関係で、元号についてはどうお考えですか。来年五月には新しい元号になる予定です。確かに直接の関係はありません。ただ、元号には国を治めるとき、この一年一つがななく治めてきた。次の一年も一つがななく治めていく。こう、という循環の考えが背景にあると感じる。言えるのは、時間是一本化するようなものではなく、もっと豊かなものだと感じます。明治にはじまる一世一元の制以後、元号は天皇の治世の表示を除けば、西曆以上の情報はなにも盛り込まれなくなりました。これは中国の明朝から始まった制度で、天皇を権威づけるため、中国の皇帝制度を見習ったものでしょう。かつてはもっと臨機応変だったよう。平安時代から江戸時代まで千余年間に二百回ほど元号が改元された。例えば書くときに西曆だと算用数字が、旧曆だと漢数字がしつくりきますよね。同様に、充実した時間の再生のため、新しい元号が旧曆と結び付けたいいな、と。旧曆に記憶された伝統と文化、僕らが日々体験している季節感が結びつくようにないかな、と思えます。

梅雨空の七夕。冬真っただ中の正月。満月かどうか分からない十五夜お月さま。季節感が豊かな日本文化のほずなのに、伝統と曆がずれている。原因は明治維新で旧曆(太陰太陽曆)を無理やり新曆(太陽曆)に変えたことにある。日本人の季節感を取り戻すため、月の動きを大切にす旧曆を復権させ、新曆との併用を呼びかけているのが広島大名譽教授の美学者金田晉さん(へ)だ。「旧曆の勧め」を聞いた。(増村光俊)

あなた・すずむ 1938年7月15日生まれ。堺市出身。大阪府立三國丘高校から東京大学文学部へ。69年から広島大に来て総合科学部教授などを経て、2000年に退官、名誉教授に。山口県下関市の東亜大総合人間・文化学部の初代学部長になる。現在は広島県呉市の蘭島蘭美術館の名譽館長などを務める。専門は美学。金田さんは「哲学、

倫理学、美学を分けるのは日本だけ。世界的には三者は不可分のもの」と話す。現象学、実存哲学を研究するうちに、西曆のような直線的な時間の流れよりも循環的な時間の方が豊かだと気づき、曆の問題に取り組むように。日本の伝統文化を整理するために旧曆が適していると考え、新曆との併用を呼びかけるようになった。

十年以上前になるが中国で一年間生活し、中国人の生活に旧曆がいまだに生きていることに驚いた。当初は「やはり遅れているのか」と考えたが、一年後には「旧曆の方が人間の実感に合っている」と思うようになった。真冬の正月より、春が目の前に来ている春節(旧正月)の方が新しい。

一年が始まる気がする。帰国してからも新曆一本やりの生活に違和感を感じた。そのうちに、金田さんについて知った。多様性を重んじる考えなの。この考えの端々から感じた。ひとの考えに凝り固まるより、さまざまな思想が入り乱れている社会の方が住みやすくて深い。曆の問題に限らないと思う。

インタビューを終えて